

④ 私の戦争体験

服部 昭 88歳

終戦の時、私は国民学校2年生であった。もともと、家族は名古屋市に住んでいたが、このころは母親と私と弟二人は岐阜県多治見市に疎開し、父と中学生の兄2人は名古屋に残っていた。

この年、1945年5月ごろであったか、多治見で学校から帰る途中、空襲警報下で米軍艦載機による機銃掃射に出会った。田舎道で周りは田んぼであったが、戦闘機は間近にきて、まさに操縦者の顔が見えたほどだった。バリバリというものすごい音がして、銃弾が道に飛んできて子どもたちは田んぼに転げ込んだ。幸いこの時、周りに負傷者は出なかったが、多治見駅に着いた時、血まみれの子どもを抱いた母親が呆然と立っていた。おそらく、この時の被害者であろう。警察も、医者もいなくて駅員がうろうろしており、沢山の乗車客が集まっているだけだった。

もう一つ、これは、たまたま終戦直後、名古屋の国民学校に通っていた時の出来事であった。朝の集団登校時の通学路に、中年男性の死体が転がっていた。子どもたちは、死んでいる、死んでいる、と言いつつも、そのまま現場を離れて学校へ向かっていった。この死体の周りには、近所の人、警察も誰もいなかった。子どもたちは通学時、死体のこと、別に話題とするともなく、無関心のまま過ぎ去っていった。私には、なんだか珍しいものに出会ったくらいの印象が残っていた。

空襲といえば、住民には恐怖のひと時であり、もちろん、当時の多治見では大きな出来事であって、戦争の怖さをありありと、見せつけられた。血まみれの被害者に出会ったことや、道路の死体に直面するのは珍しいことであったが、このことを、家に帰って話することもなく、次の日の学校でも話題になることはなかったように思う。これを戦時下の日常というのだろうか。

戦争の体験では上述のほかに、空襲で自宅の周りが焼けて、家族で待避していた防空壕を出て逃げ回ったことや、近所の人たちと集まって天皇の終戦の放送を聞いたときのことなどは、いまだに脳裏から消えないで、時々何かの時に思い出すことがある。

当時は、生きてゆくのが精一杯という感じの毎日であり、食べることが何よりの楽しみであった。それ以外に楽しみと言ったら何があっただろうか、友達と遊ぶと言っても、別に遊ぶ道具もなし、せいぜい戦争ごっこぐらいであったか。学校では、まともに勉強していなかったように思う。そのせいか、学校のこと、授業のことは全く頭に浮かんでこない。